

9月28日から10月5日まで東京で開催されている魯迅美術学院教授の王希奇教授の大作油画《一九六四》が日本の各界で熱烈な反響を引き起こしている。

巨大油画《一九六四》は幅20m、高さ3mで、魯迅美術学院教授の王希奇教授が7年の歳月をかけて完成させたものである。この作品では、1946年の葫蘆島における日本人残留者の送還の様子が独特な芸術的構成で描かれている。画面全体でその年の日本人捕虜や残留者が船で日本に送還される歴史的瞬間が描かれている。東京美術倶楽部で開催されている展覧会には多くの日本の芸術関係者や市民が訪れている。その中には今や白髪頭となった大送還の経験者も少なくない。日本の元文化庁長官の青柳正規氏もこの年の送還者の一人である。青柳氏は4年前に瀋陽で制作現場を見学しており、完成した絵画の前に立った時、万感胸に迫るものがあった。

元文化庁長官、青柳正規氏：私が中国から送還されたのは2歳4ヵ月の時でしたので、その時の記憶ははっきりしたものではありません。しかし、母や祖母がよくこの時の話をしてくれましたので、曖昧な記憶が形作られたのかもしれない。王希奇氏の絵画はこの曖昧な記憶を鮮明に再現してくれました。

日本の舞鶴市は、その年の日本への送還者が日本到着時に上陸した都市で、60万人を超える人々が住んでいます。舞鶴市引揚記念館は、現在日本国内最大の第二次世界大戦の引揚者をテーマとした博物館です。

舞鶴市引揚記念館館長、山下美晴氏：作品を通して次々と迫ってくる命の輝きが私の心を揺り動かします。私たちは、歴史の真実を認識しないとイケませんし、国家間の友好的な交流のために努力し、共に平和を実現しないとイケないと思います。

魯迅美術学院教授、王希奇氏：私は今回の展覧会を通して、人々に心から平和を愛し、平和に関心を持ってほしいと願っています。戦争に勝者はありません。そして最も大きな被害を受けるのは、ここに描かれている市民や子供たち、無辜の子供たちなのです。

この絵画展の開催は日中国交正常化45周年の年であり、朝日新聞、毎日新聞、NHKテレビ等のマスコミの注目を集めている。

NHK展博事業本部部長、秋山大介氏：この歴史を表現した巨大油画を創作した中国の画家に私は謹んで感謝の意を表します。日中両国の国交正常化の記念の日に開催される展覧会には多くの日本人が来館し、見学されることと思います。

展示期間中に、日本の城西大学において、中国、アメリカ、日本からの専門家によるこの絵画をテーマとした学術シンポジウムが開催された。この会議が芸術的特色や創作の成果等について討論された。

中国社会科学院研究員、劉悦笛氏：この絵画は人種、国家、文化を超越した一つの大きな作品です。私は、今回の展覧会は日本で大成功した、そしてとても重要な企画であったと感じています。

アメリカ、マサチューセッツ大学、ブライアン氏：この作品は生き生きと、そして視覚言語により精確に歴史を再現しており、人々が改めて戦争について考えることができます。また、この作品は日中間の芸術交流の懸け橋ともなると思います。